

# 大阪損保革新懇ニュース

NO. 16.

2000.1.6.

大阪損保革新懇事務局 〇六(六二三)一〇九五  
大阪市中央区道修町三の三の十  
大阪屋道修町ビル五F 道修商事(株)内

新春アピール

## 今度こそ、全国に自慢できる知事を送り出そう

## 私たちは、再びあじさかさんを応援します

二〇〇〇年一月五日

大阪損保革新懇世話人会

皆さん明けましておめでとございます。  
いよいよ2000年を迎えました。しかし2000年が明けたというのに、日本の政治・経済には暗雲がたちこめたままです。自民党政治は長い歴史の上でもどうしようもない行き詰まりに立ち至っており、その打開のため発足した自公連立路線も国民が直面しているくらし・雇用・健康・教育などの問題に対しても解決の展望を持っていません。

ことしは総選挙の年です。この選挙は二十一世紀に向かう国勢の流れを左右する大きな歴史的意義を持っています。自公路線に厳しい審判を与え、国民の立場に立った政治・経済への流れに変えるチャンスです。

私たちが掲げる革新三目標(平和・民主主義・生活向上)を一步進める絶好の機会でもあります。

とりわけ、私たちが住む大阪では2月6日に知事選挙がおこなわれます。大阪府民の良識・世論は「破廉恥」ノック知事を就任わずか8ヶ月でノックアウトしました。今度こそ、巨大開発優先、教育・福祉・医療切り下げのオール与党による大阪府政にきっぱりとノーと表明しようではありませんか。

## 『どうするどうなる 損保の未来』編集進む

現在、大阪損保革新懇「ブックレット編集委員会」では10月8日の第二回総会での「品川講演」を中心に職場各層の現状や感想を内容とする『どうするどうなる 損保の未来』の編集に取り組んでいます。

主な内容は

刊行にあたって

第一部 講演記録『21世紀の経済社会と損害保険産

業の新しい進路』(経済同友会元副代表・日

本火災相談役品川正治氏)

第二部 私たちの報告と主張 『いま、職場は』

第三部 大阪損保革新懇の主張と呼びかけ

おわりに

で約50ページの予定で、2月末発行します。

「あじさか」さんはいち早く不況打開・財政再建・府民の暮らし優先の21世紀の希望ある清潔な大阪の実現という政策を表明されました。一方、ノック知事を支え、ノック知事のわいせつ行為の民事訴訟敗訴が明らかになって、もかばい続けてきたオール与党側は政策を示すどころか、候補者の選出をめぐってドタバタ劇を繰り広げています。連合大阪と関係連が手をくんで大阪と関係のない新候補者を推薦してきたことも今日の労働運動の姿勢を示す特徴といえます。

大阪府政を変えることは単に大阪での勝利にとどまらず大阪から日本の政治の流れを変える力になります。

2000年幕開けと二十一世紀を目前にした歴史の大激動のこの時期、私たちは今度こそ大阪府民の良識を發揮し、全国に自慢できる知事を送り出そうではありませんか。私たちは新年早々、あらためて『私たちも「あじさか」(真)さんを応援します』のアピールを確認し、革新府政実現のため奮闘することを誓い合いました。仲間の皆さん、職場の仲間・家族・友人・知人に力一杯呼びかけ、2000年の幕開けにふさわしい情勢を作り出そうではありませんか。

## 品川正治氏、各紙に登場

大阪損保革新懇第二回総会で講演していただいた品川正治氏はインシュアランス新年特集号に『損保産業の新しい進路』―新しい損保産業構築の座標軸―と題して特別寄稿をされています。

また、しんぶん『赤旗』元旦号から掲載されている各界著名人「発言2000」欄の二番手として登場。「資本主義の質が問われる時代」として「日本企業のおかれている現状」「企業社会と市民社会の乖離」「平和憲法にふさわしい経済のあり方」などについて語り、「20世紀の半分を経済人として生きてきた私の2000年を迎えた新年の、しかし人生を通じた一つの結論です」と締めくくっています。

# 今、高校では 講師：森本光展氏（大阪府立高校教師、カウンセラー）

七〇名の仲間の参加で会場は満席となり、現場の生々しいお話に、感動と同時に、この課題でも父母を含めた大きな運動が求められていることを痛感しました。  
講演内容を紹介します。

## いっしょのモデルが見えない

文部省は「教育改革」と言い、私のいる天王寺高校も「学校改革」がいわれる。学校全体が揺れ動いている現状だが、制度的な改革だけでいいのだろうか。カウンセリングをしていて、一対一のカウンセリングとか子の育て方だとか、そういう事だけでは解決がつかないような問題があり、学校のあり方とか現代社会、現代文明の問題などの矛盾を一身に家族が引き受けている感じがする。

現場の高校生は人生のモデルを展望しにくい時代に生きている。大人の立っている場所が見にくく、小中の生徒にとってはものすごく先の事で、学校がとて長いような感じだ。「仕事って何」と思っても、サラリーマンで夜遅く帰ってくるので、父の働く姿は見えない。身近な大人は母と学校教員ぐらいで、父と子の関わりはあまりない。父は家でも接待で動いているか、一日中ゴロ寝しているかが多い。「いい大人になりなさい」と言われても、モデルがないのだ。

「勉強」と自分の人生のかけ離れもある。高度産業社会、高度消費社会の中で、生活実感が欠如している。例えば草、花、虫などと触れる機会が極端に減り、様々な生活実感にかかわるような体験はない。体験しているのは家と学校と塾の「三角形」の往復で、あとは近所の公園で遊ぶかテレビゲームするか。画像とか映像の体験はあっても、実際の五感での体験はなくなっている。好奇心がなくなり勉強しているわけで、主体性がなくなる。応用がきかず、授業でも手をあげない。

「消費」「選択」社会の中で、幼い頃から欲望を満足させることに慣れ、いやなことはしない「不快排除症候群」にながっている。しかも社会が多様化しており、学校は数ある情報源の一つにすぎない。塾などの受験産業も発展しており、子供にとっての学校の意味が変わってきた。

## 薄れる対人関係の

## 倫理、規範

先生たちは共通して「規範が壊れている感じだ」と言う。例えば掃除当番でも、黒板係などと役割分担をしないとうまくいかず、他人の失敗や苦しみを平気で面白がる。数年前、学年主任の父が亡くなり休んだ。生徒に伝えると、悲しい顔をするかと思ったら、「授業が休める」という反応だった。

中学校の先生の話では、生徒が三階から落ちた時、他の生徒が「足を折った」などと笑ったという。自分の自由は主張するが、他人との共感性は極度に減っているのだ。

倫理の規範となる対人関係などに問題があるのだろう。天王寺高校では今年、授業中に携帯電話が鳴ったらとり上げることにした。授業中にメールで教室を超えて会話をしている生徒などもいるが、直接一対一で深い話はしない。面白かった話はしても、親密な話や悩みを打ち明けるとかはできない。対人接触が非常に少なく、よく考えると、大学生ぐらいになると一日、人に会わず、一言もしゃべらなくても生きていく。それで人間関係を訓練できるわけもなく、倫理規範もなく、思いやりが減っている。かといって、他人指向で画一化指向でもあり、例えば、授業で手をあげる時も周りを見る。突出することを非常に嫌がり、知ってても手をあげない。リーダーシップを発揮する場面を嫌う。

## “教育改革”を 高校生の現状と噛み合った

「教育改革」という名で文部省などがやろうとしていることは、特色ある学校づくりだ。しかし、高校生の現状とこの改革方向は噛み合っているのだろうか。

高校はもともと全入指向の普通教育をやるうとし、大学進学を前提にできなかった。現在は、高校進学率が九〇％を超えほとんど義務教育のようになり、「若年労働者たりえない十代後半の青年層の受け皿」になりつつある。エリート養成校もあり、多様化している。しかし、エリート養成校だろうがなかろうが、共通する高校生の現状に対する対策は全然ない。今、現場は忙しい。日本の担任は教える役割のほかにも、学校事務官（成績の通知や事務連絡）、スクールカウンセラー（進路相談など）、場合によってはスクールサイコロジスト（心の問題を扱う）の四つの仕事を一手に引き受けている。日本ではこれが普通だが、アメリカでは別々の担当がいる。これは教員の負担を大きくし、なおかつ部活動もある。

教育改革がいわれているが、私は「もっと学校に金を使え」と教育行政に言いたい。ハード面でいえば、以前、高塚高校（兵庫県）で校門に生徒がはさまり死ぬ事件が起きた。固い鉄の門だから死ぬのであり、門がなければ死ななかつた。鉄の門に象徴される現在の学校のポリシーは、塀と門で囲って逃げないようにして、教室もグレイなど人間の気力をなくすような色にしている。ものすごく個性がなく、効率を重視し低予算で済ませようとしている。校舎も教室も机もそう、それらに目をやらず「多様な学校づくり」とか言うが、現場に任せてもそんなことはできない。一斉に始まり終わるしかない、自由な討論もできない構造だ。人間関係も作れず、学校に囲い込んでいるのだ。昔の高校の方がまだ自由だった。こうした前提をもう少し考え直すべきではないか。